



債務者の経験から —台湾のケース紹介— 法律扶助基金と歩んだ債務清算への道

柯佳楨

台湾カード債務被害者の会

あの頃のことを思い出す度に、2003年に引き戻される。もう10年以上が経つのに、今なお記憶は鮮明で、これはあの苦痛を味わった人にしか分からないものであろう。

当時私は36歳。事の発端は、私が「母」と慕う人の言葉だった。7年前に知り合い、非常に信頼を置いていた人で、いつも私に宝石店を開くよう勧めてきた。はじめは資金面の問題から、そんな重荷は負えないと考えていたが、2002年の中頃、実の両親が出資してくれることとなり、2003年の初めに店を開くことになった。店をやろうという思いに変わったのは、店を開いてくれさえすれば、後のことは自分に任せてと「母」に言われたからだ。宝石には素人だった私は、全て言われるままだった。2003年の開店までの間、店に置く商品を買うように言われたので、疑いもせずに宝石を買い始め、お金が足りなくなれば銀行に借りに行った。これが悪夢の始まりだった。私はあらゆる手段を使い銀行のローンを組み、それが少しずつ積み重なって、借金を増やしていった。財務が健全性を失う中、徐々にローンの負担に耐えきれなくなり、2年間踏ん張った後、晴れて閉店と相成った。

ところが、店を閉めるとまた別の悪夢が始まった。ローン返済の督促のため、毎日銀行から電話がきた。呼び出し音を聞くたびに恐怖を覚え、電話を取ることさえできなくなった。当時の負債は少なくとも500万新台幣ドル以上あったため、家族さえ巻き添えにして、両親が心血を注いで築いた資産を全て売りに出し、弟や妹も銀行のブラックリストに加えられ、両親の住む家さえ危うく差し押さえられるところだった。自責の念と家族への申し訳なさから体調を崩し、あの年は何度入退院を繰り返したのか。当時はどうすれば良いのかと色々な人に聞いて回ったが、人によって言うことが異なり、何が正しいのか分からなくなって、最後は逃げ出すほかなかった。何をすれば良いか分からなかったため、誰にも会わず電話にも出ず、悪夢ばかり見て夜も眠れなかった。こうした状態が何年も続いた。今振り返っても、自分がどうやってあの時期を過ごしていたか思い出せない。人は一歩踏み違えるだけで実に大きな代償を払わなければならない。

2003年の開店から2004年の閉店後もこの悪夢は続いた。そんな中、2016年の12



月初め、米国にいる妹が柯文哲台北市長のFacebook上の法扶会（法律扶助基金）に関する情報を見つけて電話をくれた。妹の勧めで法扶会に電話してみると、12月25日の説明会に参加するよう言われた。説明会に出て、初めて私のような人を助けてくれる団体があることを知った。私は説明会当日に申請を行い、債務返済をスタートさせた。法扶会と弁護士と共に努力すること1年あまり、幸いにも今年の2月末に清算・免責の認可が下り、10年以上続いた悪夢がようやく終わった。法扶会と弁護士の先生には心から感謝している。彼らのおかげで私は10数年の債務者人生から抜け出し、新たな人生を手に入れることができた。